



【a.Labo】とは、2012年からIAMASがソフトピア地区でスタートする地域に公開する活動である<IAMAS labo>のひとつです。IAMASで教鞭をとる作家達を中心となり、現代社会と芸術表現との関係を問い直し、メディア社会における未来の文化を模索し実践していく、ひとつの芸術運動です。

蓄音機や写真、映画の発明以来、人類は「装置を用いた表現」の様々な可能性を拓けてきました。それらがすべてデジタル技術によって統合された現在、私たちは改めて自らの「文化」というものを問い直す時だと感じています。装置を使って今現在も生み出されている無数の音楽や映像をはじめとする様々な表現、それらが単なる「社会現象」ではなく、本当に、未来の人々からも尊敬され共有され得る営みなのか？ この当然すぎる問いに、a.Laboはソフトピア地区のオープンな空間で行われる様々なイベントやディスカッション、そして作品制作などの実践によって答えていこうと試みます。 (三輪眞弘)

a.Labo メンバー：

安藤泰彦 (メディアアート作家)、小林昌廣 (批評家、IAMAS 図書館長)、
前田真二郎 (映像作家)、前林明次 (サウンドアート作家)、三輪眞弘
(作曲家、a.Labo 代表)



三輪眞弘 中部電力芸術宣言

中部電力芸術宣言
最終版 (2009/8/25)、2011/3/13 公開

いついかなる時でも電気が必ず供給され続けることを前提として、人類が未来を考えるようになってから、ほぼ半世紀が経った。この前提は、近現代の、テクノロジーによって生み出された数々の地球的規模の危機はテクノロジーによってでしか解決できないと考える思想、すなわちひとつの「信仰」の全面化を意味すると同時に、人々が自らの責任と子供達の未来を考えることが、そのまま「今よりもさらにテクノロジーを進歩させること」へと回収される、まったく新しい時代を生み出した。我々はこの状況を、厳然たる事実として認めつつも、この事実に対して自覚的かつ批判的であるために、人類史におけるこのような発展段階を「電気文明」と名付け、そこから生まれる様々な視覚及び演算装置による創作一般を「装置を伴う／による表現」と呼ぶことにする。

中でも音楽の分野では、伝統芸能はもとより現在まで営まれてきた「芸術としての音楽」は、そのほとんどが芸術家の技芸、即ち人力を前提とし、表現における人力以外のエネルギーやそれに伴う装置の介入をかたくなに拒絶してきた。しかし、結果的にそれは「芸術としての音楽」を電気文明以前の古い音楽概念及び様式に束縛し、同時代性を奪われた思弁的な営みへと導いてしまった。我々は、例えば現代の「音楽」がほとんどの人々にとって、いわゆる「現代音楽」ではなくポップスを意味しているという事実を思い起こすべきである。しかし、「芸術としての音楽」がもはや電気文明において成立し得ないということではなく、また電気文明における同時代の「音楽」が娯楽として消費されるポップスだけに限定されることも我々は考えていない。そうではなく、人類が死者を手厚く埋葬するようになった太古から地球上の様々な文化に受け継がれてきた宗教、芸術のまったく新しいあり方を、我々の手によってこの電気文明のただ中で模索し、創造活動を通して実践していくことを目指すのである。

その際、活動の、いや、そもそも人間生存の大前提となった電力供給に我々は常に意識的であらねばならない。一体、電気がどのような物理的特性において、どこから、どのようにして提供されているのか？ その実態を把握せずに我々ははやこの世界を決して語り得ないにもかかわらず、人々はそのことの持つ意味についてあまりに無自覚である。例えば、日本では現在 10 の電力会社によって（家庭用は）100V/200VAC 電力が供給されており、その電力網は県境を越えた「地方」という単位に対応している。つまり地方文化と電力会社はほぼ 1 対 1 の対応関係にあるという事実、さらに、東日本と西日本というふたつの領域が 50Hz と 60Hz の二種類の交流周波数によって峻別されているという事実は、「地方文化の差異」を、それとは本来まったく無関係なはずの、電力各社の電力網区分が代表していることでもある。さらに、それら各地方電力会社が供給する電力の起源に我々は注目する。すなわち、それが太陽由来の電気なのか、そうではないのか？ 地球上生物の一員として我々は、ほぼ無尽蔵に与えらる太陽エネルギーに由来しない電気はすべて、人間が「資源」という名の下に自然環境に対して行う地球規模の略奪行為として今後断固拒否する一方、たとえその発想に変わりはないとしても、水力、風力、太陽光発電等の太陽由来の電力は容認せざるを得ないだろう。以上のような自覚に基づき、我々はまず、発起人の在在する中部電力が供給する電気によって電力芸術活動を開始し、「装置を伴う／による表現」を電力会社名として名付けられた各地方文化において運動を展開させていくことを目標とする。

言うまでもなく、電気の地域性によって作品が変わることはない。しかし、西洋音楽において、たとえば現代の管弦楽作品が、世界中の都市に遍在するオーケストラという、地域文化の固有性を越えたグローバル・スタンダードを前提として作曲家独自の表現を可能にしていることと同様、グローバル化社会における究極の前提であるユニバーサルな電気を我々がどのように捉える／扱おうかこそが今、我々に問われているのである。それは地域文化の固有性や作家の独自性を、現在考え得るもっともニュートラルな条件の下に映し出す、ひとつの鏡となるに違いない。確認しよう。なぜ電気なのか？ それは、電気エネルギーがすでに我々の社会の、思考の、そして身体の一部であるからに他ならない。

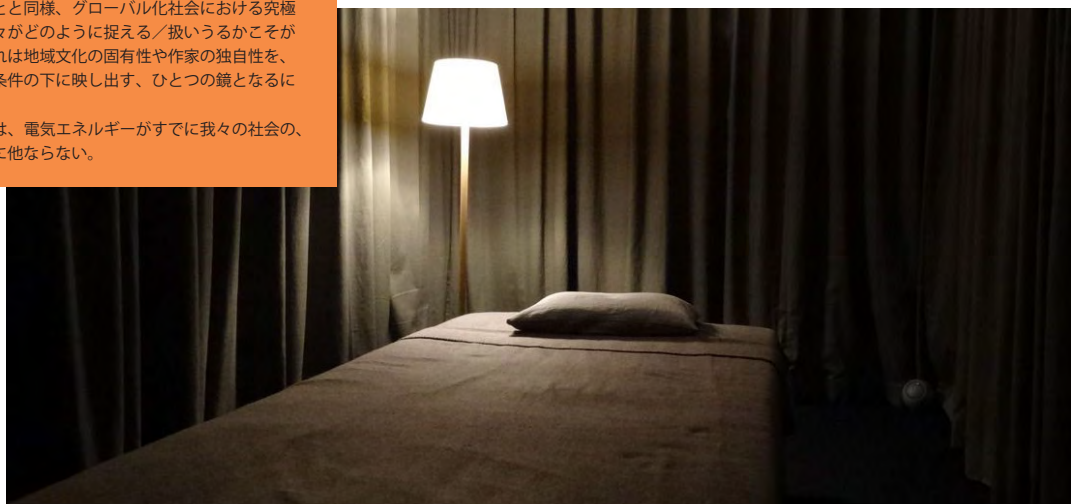
「a.Labo キックオフ打ち合わせ」イベント

「3.11 への応答」

概要

a.Labo の 4 月からの正式スタートに向けて、初の公開打ち合わせを行います。第一回目のテーマは「3.11 への応答」。今日を生きる私たちが未来の芸術、文化について考え、実践していくためには、まず、このテーマから出発するしかないという思いから、a.Labo メンバーそれぞれが 3.11 以後の活動を紹介しながら討論します。

- (1) 開催日時： 1 回目 平成 24 年 3 月 23 日 (金)
18:30~20:00
2 回目：平成 24 年 3 月 29 日 (木)
18:00~19:00
- (2) 場所： ソフトピアジャパンドリーム・コア 2 階
(岐阜県大垣市今宿 6-52-16)
- (3) 各回の担当メンバー：前林明次先生 (1 回目)
小林昌廣先生 (2 回目)
- (4) 定員： 各回 10 名程度 (申込不要)
- (5) 参加費： 無料
- (6) 問合せ： IAMAS 産業文化研究センター [RCIC]
tel. 0584-75-6606 fax.0584-75-6637
<http://www.iamas.ac.jp/>
- (7) 主催： IAMAS 情報科学芸術大学院大学



世界の中心で3.11を語るとは？ a.Laboへの期待を寄せて

Ryo Hara 2012年3月24日 11:09



「東京とか、東北以外の地域は震災の関心がみんな原発問題ばかりになっちゃって、それ以外の問題は意識されなくなっちゃったよね」という声は、だいぶ前からちらほら。大垣で開催された昨日の「a.Labo」にも、同じような「社会現象」を感じた。a.Laboは、IAMAS 情報科学芸術大学院大学の、主にアート系の先生方による活動で、「メディア社会における未来の文化を模索し、実践していく、ひとつの芸術運動」とされている。昨日は、4月から始まる a.Labo のキックオフに向けた公開打ち合わせということで、滅多にない機会と思って拝聴した。いまいるこのドリームコアは、岐阜県や IAMAS の有志の努力もあり「やってみないとわからんけど、まずはやってみよう」という進取の気象に溢れており、a.Labo もそのうちのひとつ。どんな議論になるかわからないけど、まずは一般の参加者も混ぜこぜにして、一度やってみようというのが、昨日の主旨（だったように思う）。なので、周到に準備された会でなかったし、それでいいのだということをはじめにお断りしておく。

今回のテーマは、「3.11への応答」。

被災地以外の地域では、3.11はもはや、意識して思い起こさないと話題にはならない。だからこそ、こうしたテーマを真っ先に取り上げたのは、すばらしいと思った。嫌でも思い起こしてしまう地域の人々からすれば、もうやめてくれという感情もあるかもしれないが、そうでない地域の人々は、何度でも意識してやったらいいんだと思う。ディスカッションでは、先生方ご自身が作品で表現した「3.11への応答」について解説があった。芸術系の大学の先生から、彼らの作品の話を受けたのは、難解ながらも非常にエキサイティングだった。芸術そのものへの理解は薄いので、内容の紹介は私には心もとないので、ここでは触れられず。この辺の自分の力不足は、残念としか言いようがない。（でも、それくらいハイレベルな内容でまったく問題ないとも思っている）

ここで取り上げたい（というか、揚げ足を取りたい）のは、それぞれの作品で、原発にかなりフォーカスが当たっていたこと。表現をする人々にとって、原子力は、戦後日本の発展や現代文明そのものを問い直す格好の素材だろうから、自ずと関心がそちらへ向くのは、当然だし、自然だろう。しかし、テーマが「3.11への応答」である以上、先生方が5人（そのうち作品を紹介されたのは3人）いて、取り上げたのがほぼ原発オンリーだったということについては、何かしらの趣旨説明が必要ではなかつただろうか。

テーマが「原発への応答」であればよかつただろうが、「3.11への応答」と題打って、原発の話だけをして、震災を忘れずにいましてよとエクスキューズできるのかと言えば、そうではないだろう。「3.11」とは地震であり、津波であり、原発事故であり、それらを直接的、間接的に経験した人々の営みであり、感情であり、そこから生み出される価値観の変化であり、それらをないまぜにした巨大な何かである。強烈な地震で生活が一変した人もいれば、無慈悲な津波でいまでも苦しんでいる人もいる。復興ビジネスで財布が膨らんだ人もいれば、「東北なんて切り離してしまえ」と言う人もいる。3.11=原発と記号化してしまった瞬間、それらの問題はすべて蓋を閉じられてしまわないか。広範な東北で、放射線の被害がなかったであろう地域の人たちが、風評とどう向き合うか。復興ビジネスで生まれて初めて東北へ来た人たちの心理の奥底には、何があるだろうか。などなど、表現の対象としてえぐり出せるものは、これでもか！というくらい存在するはず。

だが、「世界の中心、大垣」（開会あいさつの言葉より）で「3.11への応答」として論じられたものは、原発問題であった。3.11について論じようとする人々の関心は、多くが原発問題に議論が集中している。一方、3.11について行動を起こそうとする人の流れは、お金に乗っかって仙台へ集中している。前者に光を当てることで、後者が影としてカムフラージュされてしまう恐れはないだろうか。a.Laboの開催目的として、「装置を使って今現在も生み出されている無数の音楽や映像をはじめとする様々な表現、それらが単なる『社会現象』ではなく、本当に、未来の人々からも尊敬され共有され得る営みなのか？」という問いに、ディスカッションや作品で答えていくとある。3.11=原発という記号化も、批判の対象となるべき「社会現象」のひとつではないだろうか。遠い未来に、そうした記号化が定着してしまうのではないかと、という恐れがある中、現時点でそこまで記号化するの、早すぎる風化であり、そこで論じられる「3.11への応答」は、むしろ「原発事故をモチーフにした自己表現」（つまり、応答する相手は自分自身）の域を出ないのではないだろうか。2012年3月の時点では、問題はもっと複雑で、リアルなはずだ。

a.Laboに大きな可能性を感じたのは、最後に小林先生が別な切り口からWEBサイトや歌舞伎界からの応答について示してくれたこと。あのプレゼンによって、原発事故やそれに関する作品が、世界に横たわるあらゆる問題やそれに対する表現のひとつとして相対化され、「3.11への応答」というテーマにぐっと奥行きができたのではないだろうか。私のような素人には、個々の作品も魅力的だが、それを生み出した先生方の意識自体が、どんな文脈に落とし込まれて行くかという視点がほしい。

もうひとつ幸いだったのは「フクシマ」という記号がほぼ使われなかったこと。震災より前に、「福島」と「福島県」では意味が違うんだという話を聞いたことがある。東北は広い。各県内も広い。よく言われるのが、「福島県」であれば、浜通り、中通り、会津と異なる文化圏がひとつの「広域自治体」（と表現するほうが確だろう）を形成していて、「福島」と表現すると、中通りの福島市らへんを指すらしい。もっと細かく言うと、福島県は7つの地域に分類され、県全域でアクションするなら、各地域からキーマンをアサインしないと動きにくいなんていう話も聞いたことがある。多くの指摘を待つまでもなく、「フクシマ」という記号は「福島第一原発」を起源とするもので、多様な文化と可能性を内包する福島県全域を指すものではない。原発から100km離れた地点にあって、平日ですらホテルも確保しにくいほど復興で沸き立つ仙台と、同じく原発から100km離れた地点にあって、一斉に観光客が引いて行った福島県会津地方の差は、「フクシマ」という記号の歪んだ解釈により加速された社会現象と言ってよいだろう。

昨日の議論を、原発事故で被害を受けた地域でやったら受け入れられるであろうか？という問いが、a.Labo終了後の雑談として、参加者の方からあった。おそらくNOだろう。「だから何？」くらいかなと。でも、現場とそれ以外の場では、取り上げ方は違っていい。ただし、テーマの記号化には影が伴う。（もちろん、このノートも同じ危険をはらんでいる）3.11をモチーフとした表現活動へのアラートとして、原発事故を取り上げた「プロ市民」たちが今年の3月11日に起

こうした市民運動を比較対象として想起したい。彼らのアクションには、Facebook 上でも東北の人たちから批判の声があがったのを多数見た。死者の冥福を静かに祈るべき日に、なぜ、東北で行うのかと。平時の市民運動の手法は、危機が起こった現場に当てはまらないのでは？という疑問がわく。プロ市民の親玉のひとりと目された人物が、震災当時の総理大臣であったことも含めてだ。東北の人たちに目立つ特徴は、(これまた安易な記号化になってしまうが)一言で言えば「質実剛健」。あらゆる対象に向かって、どっしりした質感を見抜こうとする傾向が強い。プロ市民のお祭りは、彼らの心には響かない。こんなわかりきった話をいまさら書くこと自体に違和感を覚えつつも、やっぱり書いておかないと忘れ去られてしまう(そして、自分も忘れてしまう)という心配のほうが多い。IAMAS の叡智の関心が、こうした問題にも向けられることに、少しだけ期待を乗せて。

最後に、芸術 ×3.11 で、忘れられないネガティブな思い出がある。昨年の「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン『熱狂の日』音楽祭 2011」だ。毎年ゴールデンウィークに、有楽町の東京国際フォーラムおよびその周辺で開催されるクラシック音楽の祭典で、自分にとっては、毎年行こう行こうと思いつつも、足を運べていないイベントのひとつだった。震災から 1 か月半を経て、ようやく東北新幹線が東京と仙台を結んだゴールデンウィーク。その喜びも胸に、束の間であるが、晴れやかな気持ちで我が地元、東京で音楽に触れたいと思っていたのが、海外の音楽家たちが軒並み来日をキャンセル。原発から遠く離れた東京でだ。もっと近い仙台から心躍らせ、足を運んだ私や連れにとって、こんなに残念なことはなかった。

が、ひとつ弁論すれば、彼らだってアーティストである以前に、無垢な一生活者だ。アーティストと生活者という天秤で、後者に身の危険という重りの乗せたら、後者が重くなるのは仕方ない。しかし、だ。では、その判断はギリギリのところで行ったのか？と言えば、そうではない。東京に数日間滞在するだけという、かなり手前の状況で、彼らはアーティストという後天的な塗装をはいで、一生活者に戻ってしまったのだろう。まさに「震災で地金が出たな」としか言いようがない。

個人的には、音楽と平和という、本来親和性が高かったはずの 2 つの言葉が、はっきりと乖離した瞬間だった。もう、彼らには、プロのアーティストとして逃げた責め苦を一生負ってほしいくらいだが、世の中なんでもわかりあえたら気持ち悪いことこの上ないので、彼らについては、まあ、幸せなアーティスト生活を送れるよう、かの地で頑張ればよいのだと思う。こっちだって、そもそも来なかった連中の名前すら忘れちゃったし、この議論はそれくらいいい加減なものだ。だからこそ、今年もラ・フォル・ジュルネを楽しみにしている私の連れのスタンスが、一番シンプルで正しい楽しみ方だとも思う。彼らは表現のテクニックにおいてプロフェッショナルであり、それを突き詰めれば、一職業人としての社会的責任など不純物にすぎないのだから。逃げたアーティストたちにとっては、彼らの自己表現がそんなもので汚されてはいけぬのだ。たぶん。

3.11 にはすでに無数のアーカイブが存在する。いずれのものも、ひとえにアーカイブを作った人々の熱意や使命感、行動力の賜物だ。それこそ、「装置を使って今現在も生み出されている無数の音楽や映像をはじめとする様々な表現、それらが単なる『社会現象』ではなく、本当に、未来の人々からも尊敬され共有され得る営み」として評価されてもよいだろう。「3.11 キオクのキロク」なんて、仙台市民による最高傑作と言ってもいいはずだ。それら各種アーカイブに「3.11 への応答」と題された議論や、そこで紹介された芸術作品が加わることは、あるのだろうか。あるとしたら、それはどのような意味付けで評価されるものであるだろうか。このいい加減なノートも、不勉強な個人がつづる、小さな小さな点描として、どこかのサーバーにアーカイブされる。

ともあれ、こうしたことを IAMAS の先生方と考え、議論できる場が、「世界の中心、大垣」に生まれたのは大きな喜びであり、心躍る素晴らしい実験だ。社会と芸術の接点について、異分野の人たちと論じ合うことができるなんて、もう、イノベーションの匂いがぶんぶんするじゃないか！

ドリームコアには、あらゆる活動が、ごった煮状態で生まれている。MiMoS が 3 年前から木曜夜に「だてべん」を開催していたように、毎週木曜に「モバイルカフェ」と題するミニセミナーがある。

4 月から毎月 1 枠いただけることになったので、この枠を「3.11 への応答」への応答として、「after3.11 東北胎動」と銘打ち、私の身近で起こっている様々な活動や人、企業を大垣へ招き入れる場としたい。紹介したいものには、3.11 を直接のテーマや契機としたものもあるし、そうでないものもある。そうしたものをないまぜにした“巨大な何か”が 3.11 であり、「世界の中心、大垣」でアピールすることで、東北から未来への希望を見いだす一助になればと思う。

三輪 眞弘



ありがとうございます。このようなコメントをいただけたことはある面で大いに反省するわけでもありますが、前林先生をはじめとするぼくらは本気でやってみたからこそそいだけた応答だとも感じています。何となく感情的に応援されたり拒否されたりするのではなく、いただいたような感想、ご意見によってぼくらは鍛えられていくわけで、まさにそのような場が世界の中心である大垣に今、必要なのだと切実に思っているからこそ、まずは「やってみる」ことにしました。どうか今後ともぼくらを鍛えてください。ぼくらはまた難解な専門用語で隣人をけむにまくような事にはうんざりしているのですから。

今日は、東京六本木の AXIX の "Public-action" 展、そしてそれに続く NxPC.LAB のクラブイベントに言って来ました。「後はお若い皆様で・・・」ということで今、早々に帰宅しましたが、今も IAMAS 卒業生をが多数集まるノリノリのライブイベントは続いているはずですよ・・・

小林昌廣



この10日くらいで夥しい数の「3.11」本を超速読したのですが、そのなかの一冊、大澤真幸の『夢よりも深い覚醒へ』(岩波新書)は、じつによくまとめられた理論書でありながら、実践の書としてはまったく役に立たない、あくまでも傍観者ないし歴史学者的な記述に満ちていますが、その冒頭近くで、彼はテリー・イーグルトンの "Sweet Violence" について触れています。

イーグルトンによれば、破局をもたらす悲劇の発生形態は二つに分類されます。

第一の悲劇は、「息が止まるような強烈な破局、破壊的な出来事が、突然、外から侵入すること」であり、第二の悲劇は「袋小路のような絶望的な状態が、鬱々と持続すること、つまり常態化した非常事態のこと」であります。

前者は9.11のテロが相当するでしょうし、後者はガザ地区やアフガニスタンの現状がイメージされると思います。そこで大澤真幸が続けて述べるのは、「地震・津波」は第一の悲劇であり、「原発」は第二の悲劇であるということです。そして、第一の悲劇と第二の悲劇とは往々にして重なり合ったり、一方が他方の引金になったりしているという歴史的事実が重要です。

大澤=イーグルトンの的に思考すれば、第一の悲劇である「地震・津波」は現実的かつ当事者的な災害=破局であり、他者が当事者と同質に入りこむことの困難な場面があります。つまり、どんなにがんばっても被災者自身にはなれない。一方、第二の悲劇である「原発」は、入江先生のご指摘のようにすぐれて公共性の高い問題であるがために(もちろん当該地域の住民とか原発で働く職員などの当事者は存在しますが)、ある意味誰もが「平等に」コミットメントできる問題であるわけです。

ぼくも含めてアートに関わる人間が無自覚に吐いてしまう「表現」ということばの重さは、これら二種類の悲劇を想定したときに、異なった重量を呈することになるでしょう。もちろん、では「地震・津波」に対して芸術表現は何が可能か、といったようなジャーナリスティックな問題ではありません。そんなに簡単な話ではない。

答えはありません。あくまでも「応答」です。ただし、前林先生も触れられていましたし、後期デリダも論じていますが、応答 response は責任 responsibility と結びつき、つまりは他者からの問いかけに応答する可能性 respons-ibility、すなわち責任を有することがぼくたちには必要です。

「3.11 への応答」というタイトルは、ただちに「3.11 に対して責任をもつ」という意味合いを出来させることになるのです。

イーグルトンが指摘する二つの危機を、大澤真幸はさらに社会進化学における絶滅のパターンへと読み直して、「カタストロフの進化論的構造」を描き出しています。その解説ならびに「中部電力芸術宣言」の解説、さらには「レスポンスビリティ論」など、課題はたくさんありますが、準備していきたいと思います。